

## 2023年度 講義要項（授業計画）

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	言語聴覚障害学総論Ⅱ			担当講師	松本 典之、高堀 雅子		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	多職種連携（チームアプローチ）とはなにかを知る。言語聴覚士と関連する職業の内容と、関わり方を理解する。						
到達目標	1. チームアプローチを理解する 2. 他職種の業務を理解する						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	多職種連携とはなにか①						
2	多職種連携とはなにか②						
3	医師の業務、STとの連携						
4	歯科医師の業務、STとの連携						
5	看護師の業務、STとの連携						
6	介護士の業務、STとの連携						
7	ケアマネージャーの業務、STとの連携						
8	歯科衛生士の業務、STとの連携						
9	理学療法士の業務、STとの連携						
10	作業療法士の業務、STとの連携						
11	社会福祉士の業務、STとの連携						
12	栄養士の業務、STとの連携						
13	薬剤師の業務、STとの連携						
14	公認心理師の業務、STとの連携						
15	教育機関の業務、STとの連携						
評価方法	定期試験 (100%)						
教科書	適宜資料配布						
参考書							
備 考	講義資料を読み、復習を行うこと。						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	失語・高次脳機能障害学概論			担当講師	草野 義尊		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1 年次	学 期	後期
概 要	失語・高次脳機能障害について理解する。						
到達目標	1. 脳と言語・認知機能との関係について理解する。 2. 失語症の定義、原因疾患、責任病巣、症状を説明できる。 3. 高次脳機能障害の種類、症状について説明できる。 4. 失語・高次脳機能障害の評価法について説明できる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	神経心理学とは						
2	失語症①						
3	失語症②						
4	高次脳機能障害①						
5	高次脳機能障害②						
6	失語症の評価法						
7	高次脳機能障害の評価法						
8	まとめと小テスト						
評価方法	終講試験(100%)						
教科書	配布資料						
参考書							
備 考							

2023年度 講義要項（授業計画）

回	授業計画・内容
1	言語神経学入門 なぜ神経学か？
2	言語神経学入門 神経コミュニケーション障害の研究における最近の功労者・歴史的背景
3	言語神経学入門 解剖学的位置づけ、研究の方法
4	脳部位・画像について
5	言語中枢メカニズムとその障害 言語モデルとその障害
6	言語中枢メカニズムとその障害 失語症の分類
7	言語中枢メカニズムとその障害 関連障害
8	発達中の脳における言語メカニズム 脳の成長、脳の可塑性
9	発達中の脳における言語メカニズム 小児の言語障害
10	失語症の検査①
11	失語症の検査②
12	失語症の評価①
13	失語症の評価②
14	失語症評価におけるまとめかた①
15	失語症評価におけるまとめかた②
16	高次脳機能障害とはなにか
17	全般的精神機能
18	注意機能
19	注意機能
20	記憶

21	記憶障害
22	行為
23	失行
24	空間性認知
25	半側空間無視
26	遂行機能
27	遂行機能障害
28	社会性認知
29	社会的行動障害
30	まとめ

評価方法	終講試験の点数(100%)に基づいて学修成果を判定する。 (失語症学50%、高次脳機能障害学50%)
教科書	病気が見える⑦脳・神経 徹底ガイド！高次脳機能障害 - ひと目でわかる基礎知識と患者対応 - やさしくわかる言語聴覚障害
参考書	言語聴覚士テキスト
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

## 2023年度 講義要項（授業計画）

回	授業計画・内容
1	失語症 失語症とは：その障害の特長
2	失語症 その特徴的な言語症状
3	失語症 失語症の分類
4	失語症 失語症の分類
5	失語症の近縁の特殊な障害 発語失行
6	失語症の近縁の特殊な障害 失読症・失書症
7	失語症の近縁の特殊な障害 ・純粋語聾・聴覚失認
8	失語症の近縁の特殊な障害 半球離断症候群
9	失語症の改善に関わる要因 患者側の要因
10	失語症の改善に関わる要因 言語理療側の要因
11	失語症の言語治療テクニック 刺激・促進法
12	失語症の言語治療テクニック 機能再編成による方法
13	失語症の言語治療テクニック 認知神経心理学による方法
14	失語症の言語治療テクニック 実用コミュニケーションの促進法
15	STによる失語症言語治療の例 訓練を開始するにあたって／言語訓練の具体例
16	画像読影の基礎①
17	画像読影の基礎②
18	前頭葉症状
19	前頭葉症状
20	前頭葉症状

21	前頭葉症状
22	認知症
23	認知症
24	認知症
25	認知症
26	左半球損傷にともなう高次脳機能障害①
27	左半球損傷にともなう高次脳機能障害②
28	右半球損傷にともなう高次脳機能障害①
29	右半球損傷にともなう高次脳機能障害②
30	まとめ

評価方法	終講試験の点数(100%)に基づいて学修成果を判定する。 (失語症学50%、高次脳機能障害学50%)
教科書	脳卒中のコミュニケーション障害 共同医学 ぜんぶわかる認知症の辞典 成美堂出版
参考書	言語聴覚療法シリーズ3・4 高次脳機能障害 失語症
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

## 2023年度 講義要項（授業計画）

23	高次脳機能障害各論 全般
24	高次脳機能障害各論 注意障害①
25	高次脳機能障害各論 注意障害②
26	高次脳機能障害各論 記憶障害①
27	高次脳機能障害各論 記憶障害②
28	高次脳機能障害各論 失認①
29	高次脳機能障害各論 失認②
30	高次脳機能障害各論 視空間障害①
31	高次脳機能障害各論 視空間障害①
32	高次脳機能障害各論 失行①
33	高次脳機能障害各論 失行②
34	高次脳機能障害各論 前頭葉症状①
35	高次脳機能障害各論 前頭葉症状②
36	高次脳機能障害各論 注意障害の訓練
37	高次脳機能障害各論 記憶障害の訓練
38	高次脳機能障害各論 失認の訓練
39	高次脳機能障害各論 視空間障害の訓練
40	高次脳機能障害各論 失行の訓練
41	高次脳機能障害各論 前頭葉症状の訓練
42	高次脳機能障害の援助・指導
43	高次脳機能障害の援助・指導
44	高次脳機能障害の援助・指導
45	まとめ

評価方法	終講試験結果に基づき判定する（失語症学50%、高次脳機能障害学50%）
教科書	標準言語聴覚障害学失語症学第2版. 医学書院, 東京, 2015. 標準言語聴覚障害学高次脳機能障害学第2版. 医学書院, 東京, 2015.
参考書	講義資料を適宜配布する
備 考	予習復習を行うこと

## 2023年度 講義要項（授業計画）

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	言語発達障害学 I			担当講師	岡崎 宏、山神 翔太		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	言語発達障害に関する諸神経疾患と評価法、支援法について学ぶ。また、定型発達との対比により言語発達障害児の評価の方法・指導について学ぶ。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経発達障害について理解し、それぞれの疾患の特徴について説明できる。</li> <li>2. 正常発達との対比により、障害の問題点に気づくことができる。</li> <li>3. 言語発達障害児への様々な支援法について理解し、説明できる。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	小児の社会参加と支援						
2	知的障害 1						
3	知的障害 2						
4	自閉スペクトラム症 1 ASDの理解						
5	自閉スペクトラム症 2 概念・診断・特徴						
6	自閉スペクトラム症 3 原因と評価						
7	自閉スペクトラム症 4 支援アプローチ法						
8	視覚的構造化演習 1						
9	視覚的構造化演習 2						
10	視覚的構造化演習 3						
11	視覚的構造化演習 4						
12	注意欠如・多動症 1						
13	注意欠如・多動症 2						
14	脳性麻痺 1						
15	脳性麻痺 2						
評価方法	終講試験70%、課題30%により学修成果を判定する。						
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 医学書院						
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」 第3版 医学書院 ドリルプラス 言語発達障害						
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。 隨時課題を出すので、必ず提出すること。						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

26	症例分析・研究法 2
27	症例分析・研究法 3
28	症例分析・研究法 4
29	症例分析・研究法 5
30	症例分析・研究法 6

評価方法	終講試験50%、演習課題50%により学修成果を判定する。
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 医学書院
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」 第3版 医学書院 ドリルプラス言語発達障害 診断と治療社
備 考	グループワークを通して互いに協力し合い、主体的に深く学ぼうとする意欲を重視する。

## 2023年度 講義要項（授業計画）

25	症例報告書作成演習 1
26	症例報告書作成演習 2
27	症例報告書作成演習 3
28	症例報告書作成演習 4
29	症例報告書作成演習 5
30	症例報告書作成演習 6

評価方法	課題70%、終講試験30%により学修成績を評価する
教科書	・言語発達障害学 医学書院 ・言語聴覚療法技術ガイド 文光堂
参考書	小児リハビリテーション誌 2018年10月号 gene ドリルプラス 言語発達障害
備 考	患者や家族、保護者への説明と訓練・療育を行うための実際的なスキルを身に付けることを重視する 演習課題は評価対象であるので、必ず提出すること

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	発声発語障害学概論			担当講師	稻川 良、松本 典之		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	発声発語障害学領域における言語聴覚療法について、その対象となる障害を学ぶ。構音障害（Dysarthria・機能性構音障害・器質性構音障害）、音声障害、吃音の障害像が明確となるよう、原因疾患および背景、発声発語器官に関する解剖・生理学との関係性を理解する。さらに、各障害における音声言語病理学的所見から、日常生活上の具体的な問題点を想定していく。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発声発語器官における解剖・生理学的な基本事項を理解する。</li> <li>2. Dysarthriaの原因疾患、音声言語病理学的所見を理解する。</li> <li>3. 機能性構音障害の定義、音声言語病理学的所見を理解する。</li> <li>4. 器質性構音障害の原因疾患、音声言語病理学的所見を理解する。</li> <li>5. 構音障害と音声障害の類似点と相違点を明確にする。</li> <li>6. 吃音者におけるライフステージごとの問題点を理解する。</li> <li>7. 社会生活における発話という行為の役割をイメージすることができる。</li> </ol>						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	発声発語器官の役割（呼吸・発声機能）
2	発声発語器官の役割（鼻咽腔閉鎖・口腔構音機能）
3	Dysarthriaの基礎
4	機能性構音障害の基礎
5	器質性構音障害の基礎
6	音声障害の基礎
7	吃音の基礎
8	まとめ

評価方法	終講試験(100%)
教科書	図解やさしくわかる言語聴覚障害
参考書	
備 考	

# 2022年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	発声発語障害学 I				担当講師	田中 真一、稻川 良、松本 典之、根本 皇太	
分 野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	3 単位	時 間	90 時間	学 年	2年次	学 期	前期・後期
概 要	<p>神経疾患によるコミュニケーション障害障害の中に、運動障害性構音構音障害 (dysarthria) を位置づける。</p> <p>Dysarthriaの評価・診断・治療を行うために必要な、基本的知識を習得する。</p> <p>Dysarthriaの評価・診断と結果の解釈ができ、治療・訓練・指導に活用する。</p> <p>Dysarthriaの固有の問題に配慮した治療・訓練・指導の方法を習得する。</p> <p>Dysarthriaと嚥下障害の関連性について考察する。</p> <p>Dysarthriaや嚥下障害に対する、チーム医療について考察する。</p>						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経病変によるコミュニケーション障害の中で運動障害性構音障害を位置づけ説明できる。</li> <li>2. 構音障害の種類（機能性・器質性・運動障害性）と発生機序を説明できる。</li> <li>3. 構音障害（機能性・器質性・運動障害性）の原因・病態・症状を障害別に説明できる。</li> <li>4. 発話に関する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と機能について説明できる。</li> <li>5. 発話に関する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と運動障害性構音障害との関係について説明できる。</li> <li>6. 運動障害性構音障害をきたす疾患について説明できる。</li> <li>7. Dysarthriaと嚥下障害の関連性について概説できる。</li> <li>8. 標準ディサースリア検査の概要を説明できる。</li> <li>9. 標準ディサースリア検査（発話の検査）が実施できる。</li> <li>10. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査）が実施できる。</li> <li>11. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査、補助検査）が実施できる。</li> <li>12. 標準ディサースリア検査の結果を解釈し、治療・訓練・指導へ活用できる。</li> <li>13. 運動障害性構音障害の検査法—第一次案—を概説できる。</li> <li>14. 運動障害性構音障害の検査法—第一次案—を実施できる。</li> <li>15. 運動障害性構音障害の検査法—第一次案 短縮版—を実施できる。</li> <li>16. 標準失語症検査補助テスト—発声発語器官および構音の検査—を実施できる。</li> <li>17. サンプルテープを聴取し、発話特徴抽出検査を実施できる。</li> <li>18. スピーチサンプルを聴取し、記録できる。</li> <li>19. スピーチサンプルを聴取した記録をまとめ、レポートとして記述することができる。</li> <li>20. Dysarthriaの治療について概説できる。</li> <li>21. Dysarthriaの治療—話者主体のアプローチを実施できる。</li> <li>22. Dysarthriaの治療—コミュニケーション主体のアプローチを説明できる。</li> <li>23. Dysarthriaのタイプに応じた治療ができる。</li> <li>24. Dysarthriaの評価・治療の流れを説明できる。</li> <li>25. 医学的治療、チーム医療の方法が説明できる。</li> <li>26. 咽頭の機能と解剖を説明できる。</li> <li>27. 声帯振動の仕組みについて説明できる。</li> <li>28. 発声の機序について、呼吸と関連付けて説明できる。</li> <li>29. 声の要素について説明できる。</li> <li>30. 発声行動について、音声障害に関連付けて説明できる。</li> <li>31. 発声の問題における疾患、各ライフステージ、職業などについてそれぞれ説明できる。</li> <li>32. 音声障害を呈する種々の疾患について説明できる。</li> <li>33. 音声障害の全体の診療の流れを理解し、耳鼻咽喉科医などの他職種の診療を説明できる。</li> <li>34. 音声障害における声の評価法について説明できる。GRBAS尺度についてのサンプルを聞き分けられる。</li> <li>35. 音声障害の外科的治療と音声治療について説明できる。</li> <li>36. 咽頭摘出後の無咽頭音声について説明できる。</li> </ol>						

回	授業計画・内 容
1	オリエンテーション
2	運動障害性構音障害 (dysarthria) の定義
3	dysarthriaの分類と特徴
4	dysarthriaをきたす疾患
5	標準ディサースリア検査
6	標準失語症検査補助テスト—発声発語器官および構音の検査

7	標準失語症検査補助テスト—発声発語器官および構音の検査
8	発話特徴抽出検査（サンプルテープ）
9	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
10	dysarthriaの治療—話者主体のアプローチ
11	dysarthriaの治療—コミュニケーション主体のアプローチ
12	dysarthriaの治療—タイプ別訓練
13	dysarthriaの治療—タイプ別訓練
14	まとめ
15	まとめ
16	発声仕組み I. 発声にかかわる器官 咽頭、呼吸器などの解剖
17	発声仕組み II. 発声にかかわる器官 咽頭、呼吸器などの生理
18	発声仕組み III. 発声の原理 粗密波、声帯振動の実際
19	発声仕組み IV. 発声の原理 声帯振動が成立するための条件など
20	声の調節と規定要因 声の要素
21	声の調節と規定要因 発声と生体・環境、発声の規定要因
22	発声の問題 声の発達・成熟・老化、声の問題
23	発声の問題 声の発達・成熟・老化、声の問題とその発現、声の使用、声の問題の影響
24	声の評価 音声障害の診療、言語聴覚士の診療・役割、耳鼻科の診療・役割
25	音声障害の治療 医学的対応、音声治療、気管切開・人工呼吸器
26	音声障害の治療 医学的対応、音声治療方法
27	咽頭摘出の音声リハビリテーション 咽頭の摘出
28	咽頭摘出の音声リハビリテーション 無咽頭音声
29	まとめ
30	まとめ
31	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
32	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
33	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
34	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
35	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
36	標準ディサーヌリア検査（実技）
37	標準ディサーヌリア検査（実技）
38	標準ディサーヌリア検査（実技）
39	標準ディサーヌリア検査（実技）
40	標準ディサーヌリア検査（実技）
41	標準ディサーヌリア検査（実技）
42	標準ディサーヌリア検査（実技）
43	標準ディサーヌリア検査（実技）
44	標準ディサーヌリア検査（講義と実技）

45	全体のまとめ
評価方法	終講試験 (100%)
教科書	言語聴覚士のための運動障害性構音障害学 医歯薬出版
参考書	言語聴覚療法シリーズ9・14・16 運動性構音障害 音声障害 AAC
備 考	

## 2023年度 講義要項（授業計画）

回	授業計画・内容
1	異常構音の特徴、診断上の留意点、聴き取り練習
2	構音検査の目的・方法
3	訓練の目的、適応、セッション構成例 構音訓練の適応
4	聴覚的弁別訓練、音の產生訓練 系統的構音訓練
5	音別訓練方法 声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練
6	音別訓練方法 口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練
7	その他の舌・口唇の形態異常と機能障害
8	口腔腫瘍とその治療・臨床分類
9	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価①
10	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価②
11	口腔腫瘍術後の構音訓練①
12	口腔腫瘍術後の構音訓練②
13	口腔腫瘍術後の発話補助手段
14	口腔腫瘍術後の摂食嚥下訓練
15	口腔腫瘍術後の心理・社会的問題

評価方法	終講試験100%に基づいて学修成果を判定する
教科書	言語聴覚療法シリーズ8 器質性構音障害
参考書	
備 考	

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	発声発語障害学Ⅲ			担当講師	稻川 良		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	発達にともなう正常の構音の発達を学習し、誤学習としての機能性構音障害の評価・訓練を学ぶ。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 機能性構音障害の障害像を理解できる。</li> <li>2. 構音検査を実施し、結果を解釈できる。</li> <li>3. 症状に応じた構音訓練を選択し、実施できる。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	構音の発達・定義・分類						
2	構音障害とは						
3	日本語の音声学的特徴						
4	誤り音の種類						
5	構音障害の症状						
6	声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の特徴・診断上の留意点						
7	口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の特徴・診断上の留意点						
8	異常構音の聞き取り						
9	構音検査の目的・方法						
10	訓練の目的、適応、セッション構成例						
11	構音訓練の適応						
12	系統的構音訓練①						
13	系統的構音訓練②						
14	音別訓練方法(声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練)						
15	音別訓練方法(口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練)						
評価方法	終講試験（50%）、課題レポート（50%）に基づいて学修成果を判定する。						
教科書	阿部雅子著：構音障害の臨床改訂第2版. 金原出版, 東京, 2008.						
参考書							
備 考							

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	発声発語障害学IV			担当講師	田中 真一、松本 典之		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	音声（発声）における解剖・生理などの基本的事項から、音声障害における疾患、評価、治療（外科的治療、音声治療など）などの事項について理解することができる。						
到達目標	1. 発声行動について、音声障害に関連付けて説明できる。 2. 発声の問題における疾患、各ライフステージ、職業などについてそれぞれ説明できる。 3. 音声障害を呈する種々の疾患について説明できる。 4. 音声障害の全体の診療の流れを理解し、耳鼻咽喉科などの他職種の診療を説明できる。 5. 音声障害における声の評価法について説明できる。GRBAS尺度についてのサンプルを聞き分けられる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	音声障害概論						
2	発声の原理・メカニズム						
3	発声の生理・解剖・神経						
4	音声障害の病態・病因						
5	音声障害の原因疾患①						
6	音声障害の原因疾患②						
7	音声障害の評価①（評価・診断の流れ）						
8	音声障害の評価②（聴覚心理学的検査<GRABAS尺度>）						
9	音声障害の評価③（音響分析・空気力学的検査）						
10	音声障害の治療①（治療の原則）						
11	音声障害の治療②（医科的対応・声の衛生指導）						
12	音声障害の治療③（症状的対処的音声治療）						
13	音声障害の治療④（包括的音声治療）						
14	無喉頭音声①（気管切開・人工呼吸器）						
15	無喉頭音声②（無喉頭音声の種類と訓練）						
評価方法	終講試験（100%）						
教科書	配布資料						
参考書							
備 考							

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	発声発語障害学Ⅴ			担当講師	稻川 良、石渡 千沙絵		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	吃音の基礎知識を知ることができる。 吃音の評価・診断・治療を行うことができる。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 吃音の原因を理解する。</li> <li>2. 吃音により生じる二次的障害を理解する。</li> <li>3. 吃音診療の流れを理解する。</li> <li>4. 吃音の評価方法を理解する。</li> <li>5. 吃音の訓練・支援・指導を理解する。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	吃音の歴史						
2	言語聴覚士による吃音診療の現状						
3	吃音の病態						
4	吃音の原因						
5	吃音の予後予測						
6	吃音者の心理的側面						
7	吃音の検査・評価						
8	吃音の検査・評価						
9	吃音の検査・評価						
10	吃音の検査・評価						
11	吃音の訓練・支援・指導						
12	吃音の訓練・支援・指導						
13	吃音の訓練・支援・指導						
14	吃音の訓練・支援・指導						
15	まとめ						
評価方法	終講試験点数（100%）に基づき判定する						
教科書	適宜資料配布する						
参考書	なし						
備 考	予習・復習を行うこと						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	嚥下障害学概論			担当講師	田中 真一、松本 典之		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	摂食・嚥下に必要な体の構造と機能およびそれらの器官を制御している脳のしくみを学び、口から食べることの重要性を理解する。						
到達目標	嚥下のメカニズムを知り、嚥下に関する用語やその定義などを身につける。嚥下障害の検査・診断・ケア等についての基礎的な知識を身につける。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	嚥下障害とは何かを説明できる。						
2	口腔領域の診察のしかたを理解し、専門用語を使用できる。						
3	摂食・嚥下機能と関わる領域の形態について説明できる。						
4	摂食・嚥下機能と関わる領域の機能について説明できる。						
5	摂食・嚥下の神経制御機構を簡単に説明できる。						
6	唾液の役割について説明できる。						
7	摂食・嚥下機能の正常なメカニズムを説明できる。						
8	呼吸・発声・嘔吐など嚥下に関連する機能について簡単に説明できる。						
9	咀嚼障害の原因を知り、その検査法を簡単に説明できる。						
10	嚥下障害を原因により分類でき、予後と関連づけて説明できる。						
11	誤嚥性肺炎の病態と予防法や誤嚥時の対処法について説明できる。						
12	嚥下障害の検査・診断法の概略について説明できる。						
13	食事指導の在り方や嚥下補助食の特性について簡単に説明できる						
14	高齢社会における摂食・嚥下機能の意義とSTが果たすべき役割を知る。						
15	嚥下造影検査の方法を知り、簡単な画像を読み取ることができる。						
評価方法	終講試験 (100%)						
教科書	適宜資料配布						
参考書	嚥下障害ポケットマニュアル 言語聴覚士ドリルプラス「摂食嚥下障害」						
備 考	講義資料を読み、復習を行うこと。						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

回	授業計画・内容
1	摂食・嚥下障害の基礎知識の確認（概論の復習）
2	
3	発達障害による摂食・嚥下障害
4	
5	摂食・嚥下障害のアセスメント
6	
7	NST・介護予防事業の概要
8	
9	摂食・嚥下障害に関わる内科一般の基礎
10	
11	摂食・嚥下障害の診察と検査・ビデオ嚥下造影検査
12	
13	摂食・嚥下障害の診察と検査・嚥下内視鏡検査
14	
15	訓練実施におけるリスク管理
16	
17	摂食嚥下機能評価「食事場面の評価①」
18	

19	摂食嚥下機能評価「食事場面の評価②」
20	
21	スクリーニングテスト「反復唾液嚥下テスト」
22	
23	スクリーニングテスト「改訂水飲みテスト、フードテスト」
24	
25	摂食・嚥下障害における用語確認
26	
27	摂食・嚥下障害における用語確認
28	
29	摂食・嚥下障害における用語確認
30	

評価方法	終講試験100%に基づいて学修成果を判定する
教科書	よくわかる摂食・嚥下のメカニズム 医歯薬出版
参考書	プリントを適宜配布
備 考	プリントや症例DVDも供覧するので、しっかり習得するようにしましょう

## 2023年度 講義要項（授業計画）

26	退院時家族指導の作成
27	地域での言語聴覚士の役割
28	まとめ
29	まとめ
30	まとめ

評価方法	終講試験点数（100%）に基づき評定する
教科書	言語聴覚士テキスト第3版、医歯薬出版、東京、2018 言語聴覚士ドリルプラス「摂食嚥下」。
参考書	適宜資料を配布する
備 考	理論の理解にとどまらず、安全管理に徹して訓練を実践できるまでを目指す。

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	聴覚障害学概論			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	聴覚障害における評価・診断・治療を行うために必要な基礎的知識を学ぶ。また、聴覚障害児・者におけるコミュニケーション方法や、社会的問題などについて理解し、ＳＴとしての役割を考察する。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基礎的な聴覚器の構造と機能を説明できる。</li> <li>2. 聴覚の認知について、聴覚伝導路と照らし合わせて説明できる。</li> <li>3. 基本的な耳疾患と特徴について説明できる。</li> <li>4. ろう文化とコミュニケーション方法について説明できる。</li> <li>5. 成人難聴の特徴について説明できる。</li> <li>6. 小児難聴の特徴について説明できる。</li> <li>7. 聴覚障害教育の問題について説明できる。</li> <li>8. 視覚聴覚二重障害について説明できる。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	耳の役割						
2	伝音系の構造と機能						
3	感音系の構造と機能						
4	聴覚障害の医学的特徴①						
5	聴覚障害の医学的特徴②						
6	聴覚障害の医学的特徴③						
7	聴覚障害の諸問題						
8	聴覚の補償とリハビリテーション						
9	聴覚の発達と子どもの難聴						
10	ろうの文化とコミュニケーション						
11	手指でコミュニケーション1						
12	手指でコミュニケーション2						
13	難聴診療の現在						
14	聴覚障害教育						
15	視覚聴覚二重障害						
評価方法	終講試験70%、課題30%により学修成果を判定する						
教科書	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 医学書院						
参考書	病気がみえる 耳鼻咽喉科 ドリルプラス 聴覚障害						
備 考	講義資料と教科書・参考書を読み、予習復習を行うこと 隨時課題を出すので、必ず提出すること						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	聴覚障害学 I			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	聴覚評価を中心に難聴診療を行うために必要な基礎的知識を学ぶ。また各検査法の施行について演習を通して手技を学ぶ。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基本的な聴覚検査法について理解し、その特徴を説明できる。</li> <li>2. 純音聴力検査（気導聴力検査、骨導聴力検査）について理解し、施行できる。</li> <li>3. 語音聴力検査（語音明瞭度検査、語音了解閾値検査）について理解し、施行できる。</li> <li>4. 中耳検査（ティンパノメトリ、耳小骨筋反射検査）について理解し、説明できる。</li> <li>5. 内耳検査（SISI検査、ABLB検査）について理解し、説明できる。</li> <li>6. 自記オージオメトリについて理解し、説明できる。</li> <li>7. 問診や検査結果に基づいた聴覚評価と診断法について理解し、説明できる。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	聴覚の検査と評価①						
2	聴覚の検査と評価②						
3	気導聴力検査法①						
4	気導聴力検査法②						
5	骨導聴力検査法①						
6	骨導聴力検査法②						
7	語音聴力検査法①						
8	語音聴力検査法②						
9	マスキング						
10	中耳検査①						
11	中耳検査②						
12	自記オージオメトリ・内耳検査						
13	オージオグラムの読み方（評価と診断）①						
14	オージオグラムの読み方（評価と診断）②						
15	オージオグラムの読み方（評価と診断）③						
評価方法	終講試験50%、課題30%、実技試験20%により学修成果を判定する。						
教科書	聴覚検査の実際 南山堂、標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 医学書院						
参考書	病気がみえる メディックメディア、ドリルプラス聴覚障害 診断と治療社						
備 考	講義資料と教科書・参考書を読み、予習復習を行うこと。						

## 2023年度 講義要項（授業計画）

## 2023年度 講義要項（授業計画）

					実務経験のある教員等による授業科目		<input checked="" type="checkbox"/>
科目名	聴覚障害学Ⅲ			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	補聴器・人工内耳についての知識を習得する。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 補聴器の基本的機能と基本的形態について理解する。</li> <li>2. 実習を主体に補聴器の操作・性能測定を理解する。</li> <li>3. 補聴器の音響学について理解する。</li> <li>4. 補聴器の適応と適合について理解する。</li> <li>5. 補聴器フィッティング法について理解する。</li> <li>6. 人工内耳のしくみと手術について理解する。</li> <li>7. 人工内耳の適応基準について理解する。</li> <li>8. 人工内耳のマッピング、リハビリテーションについて理解する。</li> </ol>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	聴覚障害と補聴器						
2	聴覚障害と補聴器						
3	補聴器の歴史						
4	補聴器の歴史						
5	補聴器の種類						
6	補聴器の種類						
7	補聴器適合						
8	補聴器適合						
9	補聴器適合						
10	補聴器演習						
11	補聴器演習						
12	補聴器演習						
13	補聴器演習						
14	人工内耳						
15	人工内耳						
評価方法	レポート課題（100%）により学修成果を評定する						
教科書	補聴器フィッティングの考え方 診断と治療社 聴覚障害学 医学書院						
参考書							
備 考							

## 2023年度 講義要項（授業計画）

26	聴覚器の構造・機能・病態
27	聴覚器の構造・機能・病態
28	聴覚器の構造・機能・病態
29	聴覚器の構造・機能・病態
30	聴覚器の構造・機能・病態

評価方法	レポートの採点結果100%（優／良／可／条件つき可／不可）により判定する
教科書	聴覚検査の実際 南山堂、聴覚障害学 医学書院、言語聴覚士ドリルプラス聴覚障害 診断と治療社
参考書	講義資料を適宜配布する
備 考	国家試験出題基準に準じた学習を行う

## 2023年度 講義要項（授業計画）

時間	授業計画・内容
160	各実習施設において実習指導者の指導の下、4週間を通じて1症例を受け持つ。受け持ったケースに対し言語聴覚療法診断を実施しながら上記の目標達成を目指す。上記の目標達成に至らない場合は、実習指導者よりフィードバック及び実技指導を受ける。

評価方法	実習指導者が各項目を最終評価時に優・良・可・不可の4段階で評定案を作成し、その案をもとに総合的な見地から学校が評定し単位の認定を行う。
教科書	
参考書	
備 考	

## 2023年度 講義要項（授業計画）

時間	授業計画・内容
320	各実習施設において実習指導者の指導の下、8週間を通じて1症例以上を受け持つ。受け持ったケースに対し言語聴覚療法診断を実施しながら上記の目標達成を目指す。上記の目標達成に至らない場合は、実習指導者よりフィードバック及び実技指導を受ける。

評価方法	実習指導者が各項目を最終評価時に優・良・可・不可の4段階で評定案を作成し、その案をもとに総合的な見地から学校が評定し単位の認定を行う。
教科書	
参考書	各講義で使用した言語聴覚療法関連書籍
備 考	